

# 地域と学校の「協働」の困難さに関する考察

——八王子市立浅川中学校学校林の事例から——

野村 花奈子 (広瀬ゼミナール)

HS22-1114B

## 論文の目次

1. はじめに
- 1-1. 学校と地域の連携・協働——地域学校協働活動
- 1-2. 地域と学校の間には摩擦を生む学校林
- 1-3. 本稿の目的
2. 方法
- 2-1. 調査方法と調査対象者
- 2-2. インタビュー調査質問項目
3. 分析結果
- 3-1. 地域とつながる「栗山学習」
- 3-2. 垣間見える釈然としない関係性——林をつくるコミュニティでの参与観察から
- 3-3. 垣間見える釈然としない関係性——教員へのインタビュー調査から
- 3-4. 学校林・地域連携に対して教員が持つ熱意の異なり
4. 考察
- 4-1. 学校林での地域学校協働活動の実態
- 4-2. 地域と学校を媒介する存在に対するスタンスの相違
5. おわりに
- 謝辞
- 参考文献・引用文献
- 参考資料
- 付録

## 論文の要旨

### 1. 研究の背景・目的

少子高齢化、グローバル化、情報化など社会が複雑に変容する現代において、学校や地域社会のあり方も大きく変化してきた。これからの厳しい時代を生き抜く力の育成、地域から信頼

される学校づくり、社会的な教育基盤の構築等の観点から、学校と地域が連携・協働し、社会総掛かりでの教育の実現を図る必要がある。

これまでの学校と地域の連携・協働に関する教育政策では、地域から学校へという一方向の「支援」から地域・学校、双方向への活動「連携・協働」へと活動の重心が移され、活動の意思決定に主体的に「参画」することが要点とされている（平田ほか 2020）。地域学校協働活動において、現状や抱える課題も異なる学校と地域の「協働」関係がいかに構築されているか、両者の「協働」関係について実証的に検証していく必要がある。

本稿で事例として取りあげる地域学校協働活動の舞台となる学校林は、「総合的な学習の時間」との親和性の高さや、地域と学校の関係性を再生する力が評価されており、学校林のさらなる利用促進が検討されている（奥山 2013）。しかし、学校林は地域と学校の間には摩擦を生む要素を秘めており、地域と学校の「協働」を構築することの困難さを表出させていると考える。したがって、学校林での地域学校協働活動における、地域と学校の「協働」関係の困難さについて実証的に明らかにすることを本稿の目的とする。

### 2. 調査概要

学校林での地域学校協働活動における、地域と学校の「協働」関係の困難さを明らかにすることを目的として、東京都に位置する八王子市立浅川中学校が保有する学校林の維持管理を担う市民団体「林をつくるコミュニティ」への参与観察を行った後、地域と連携・協働しながら

学校林での学習活動を行っている八王子市立浅川中学校に勤務する教員を対象とした半構造化インタビューによる調査を実施した。

### 3. 調査結果・分析

学校林での学習活動である「栗山学習」を行うためには、市民団体「林をつくるコミュニティ」との連携が必要不可欠であり、「栗山学習」を契機として地域と学校がつながっていた。

市民団体への参与観察を実施する中で、地域側となる市民団体「林をつくるコミュニティ」に属する地域住民は、学校林での活動に際して、協力的である学校や教員に対して感謝の念や好感を示す様子が見られた。しかし、市民団体にとって主要な活動でもある「栗山学習」への参画の場面では、学校との間に摩擦が生じる様子もあった。共に活動していくための良好な関係性が恒常的に保たれているとは限らない可能性が出てきたといえる。

教員へのインタビュー調査の結果、地域側だけでなく、学校林を保有する学校側においても、学校ならではの制約が関係する場面では、地域との連携が円滑に進まない場合もあることが明らかになった。また、学校林での生徒と地域住民との交流や、「栗山学習」に非常に前向きである教員の姿が見られた一方で、教員の負担や安全面の観点から、消極的な考えを持つ教員もいる現状も明らかとなった。教員が持つ姿勢や熱意の異なりによって、学校林での地域との連携・協働が難しくなることが懸念される。

### 4. 考察

現地調査で見えてきた学校林での地域学校協働活動の実態から、地域とのつながりを大切に、地域と学校の良い関係性のもとで学校林を通じた地域学校協働活動が行われてきたということは表面上の出来事にすぎないことが指摘できる。両者が互いに感謝の念や協力的な姿勢を持ちつつも、一方で十分に相互理解できていなかったり、複雑な心情を抱えたりするケース

が見られた。これは両者を媒介する学校林が、地域と学校の間で摩擦を生じさせていることを示唆している。教育との親和性の高さや、地域と学校の関係性を再生する力が評価され、利用促進が検討されている学校林だが、地域と学校の「協働」関係の構築を困難にさせる可能性がある。

両者の関係性を図式化したところ、それぞれが学校林に対して異なる立場や考え方を保持しており、学校林に対するスタンスの相違が存在していることが分かった。具体的には、地域側となる市民団体が学校林の必要不可欠を強く捉えているのに対し、学校側となる八王子市立浅川中学校にとっては、必ずしも学校林の必要不可欠が高いとは言えないことがあげられる。このような学校林に対するスタンスの相違によって、両者間に摩擦が生じ、「協働」ではなく地域による一方的な学校「支援」の形に止まっている現状が指摘できる。

したがって、地域学校協働活動の全てが「協働」関係のもとで行われているとは一概には言えず、ここに地域と学校が「協働」していくことの難しさがある。地域と学校の「協働」関係を構築することが決して容易ではないことを、本稿を通じて示すことができた。これは他の地域学校協働活動には見られないであろう、両者間に摩擦を生じさせる要素を秘めた学校林に着目したことで導き出された知見である。

### 主要参考文献

- 奥山洋一郎, 2013, 「森林教育の場としての学校林活用の推進方策：市民団体との連携の検討」『林業経済研究』59(1):63-71.
- 志々田まなみ, 2023, 「地域学校協働活動の展開と課題」『学習社会研究』5:28-38.
- 平田俊治・畦五月・時岡晴美, 2020, 「学校教育から見た「学校と地域の連携・協働」の動向について—教育政策と学習指導要領の変遷を通して—」『香川大学教育学部研究報告』(3):35-47.